

## アニメで知る心の世界

こもれば心の診療所 羅田 享

### 今回扱うアニメ作品：シン エヴァンゲリオン 劇場版

その 11

今回のテーマ

シンジのエディプスコンプレックスへの対峙

前回のおさらい

エヴァンゲリオン Q においては、シンジが綾波をはじめ、これまで経験してきた相次ぐ喪失を受け入れられず、もがき苦しむ中、より事態を悪化させてしま

う。

シンジはその事態に直面し、強い絶望、取り返しのつかない様な罪悪感の中で身動きが取れず、なにか、もぬけの殻のような状態になってしまう。

今回のシン・エヴァンゲリオン 劇場版は、そうなったシンジの喪失に伴う心の再生と成長を描いている様に感じられる。

そして今回は心的に成長したシンジが父と対峙（エディプスコンプレックス）していく様を考えていく。

喪失という観点でポウルビィの悲哀の心理過程を説明した。

### 悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ポウルビィ】

①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックを受けている）

②思慕と探求・怒りと否認の段階

（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）

③断念と絶望の段階（激しい失意、抑うつ的体験）

④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）

2. シンジが目覚めた時、周囲の状況はどのような反応であったか？

3. 綾波は市井の人々との関わりの中でどの様に変ったか？

4. シンジの心は綾波との交流の中でどう変化していったのか？

Q の結末において、シンジは、取り返しのつかないほどの罪悪感に苛まれ、無気力な状態に陥った。そんな絶望に打ちのめされていたシンジの心を受け止める、その母親の様な環境がトウジやケンスケの暮らす第三村であった。彼らに温かく迎えらることでシンジは立ち直り始めるきっかけを作り出した。そして第三村の人々との交流を通じて、人間らしい心を持つ様になった綾波とシンジが交流することで、シンジは綾波と同じ様にケンスケやトウジ達ら村の人々と交流を深めていく。その中でシンジは主体的になっていく。

その後、綾波はシンジの目の前で亡くなってしまふ。そのシーンは非常に衝撃的であるが、一方で、第三村を離れ、ヴァンダーに乗り、シンジ自身の父と対峙していくという現実に向きあうという、分離個体化の象徴の様にも考えられる。

5. ヴァンダーに乗り込んだシンジは以前に比べてどの様に変ったのか？

## 6. シンジとヴンダーとの葛藤

再びヴンダーに乗り込んだシンジであったが、ヴンダーの乗組員のシンジに対する思いはQの様な恐怖とも怯えともつかない様子とは違い、鈴原サクラをはじめ、受容的になっている様に見える。けれどもヴンダーの乗組員はネルフ本部にヤマト作戦を行い、総攻撃をしかけたものの、その作戦は失敗し、アスカも亡くなってしまう。ゲンドウがヴンダーの前に訪れ、ヴンダーの主機であった初号機を奪い、さらに深層の「マイナス宇宙」へと向かってゆく。

それを止めようとシンジは自身がエヴァに乗ることを提案する。しかし、いざ、そうなると、ヴンダーの中の乗組員たちの思惑は色々異なっていた。そしてシンジのへの思いに関して、サクラ、ミドリをはじめシンジの提案に反対する方々おり、激しくぶつかり合う。

このシーンにおいて、情緒的に激しい思いをぶつけ合う中で、互いの思いを深く受け止めカタルシスを迎え、皆が一つの目的に向かって突き進むことにつながったと考えられる。そしてそれはシンジの心の象徴でもある様に見える。シンジは「僕は、僕の落とし前をつけたい」と言ったものの、本当に自分にはできるのか？また暴走して、ニアサーの様なことを起こしてしまい、周りを再び不

幸にしてしまうかもしれないという不安を抱いていた可能性も十分考えられる。

それ故に、きちんと決断するまでに色々な迷いがあり、その葛藤が生じていたと考えられる。色々な情緒がぶつかり合い、サクラの銃弾をミサトが身代わりに受け止めることで、シンジがエヴァに乗ることになったが、それはシンジの心の中で自分の激しい感情を自分の中の良い対象が受け止める象徴の様にも考えられる。

また、このシーンでこれまではめていることを苦痛に感じ、カヲルがはずし、彼が身代わりにつけた DSS チョーカーを、自ら装着したことが興味深い。

DSS チョーカーはこれまで、神への奉仕への象徴と述べてきたが、自ら DSS チョーカーをつけるということは、これまでの様に衝動的に暴走して、解決しようとするのではなく（それ故に色々なことを破壊してきた）、自分の行動に責任を持って行動するという決意であり、まさに心の成熟を表している。

→そしてシンジはマリの改 8 号機に同乗してゲンドウを追うためにマイナス宇宙へと突入し、その世界でゲンドウと対峙する。

## 7. シンジと父との対峙 父殺し

マイナス宇宙の中でシンジは父ゲンドウと対峙する。そこでシンジはゲンドウとぶつかり合う。その中でシンジとゲンドウはぶつかり合いながらも交流をしていく。それはシンジがこれまで触れることを怯え距離をとってきたものであり、シンジの殻であり、A-T フィールドである様に感じられる。

父と対峙したシンジはエヴァを通してぶつかり合う

ここで今一度エディプスコンプレックスについておさらい。

**エディプス葛藤 父・母・自分の三者の葛藤**：社会性の芽生え

ギリシャ悲劇のエディプス王（父を殺し母と結婚する話）から着想

子どもは異性の親に結ばれたい願望があるが、一方で敵わないとも感じる。

→社会性（自分でも母でもない第三者の出現）の獲得と未熟さへの葛藤

### 2) 父と対峙しぶつかるシンジ

シンジは、シンジの追憶の世界の中でゲンドウを倒そうとするが、全く敵わない状況が続く。シンジはゲンドウと対峙し、エディプス葛藤を乗り越えるために父を倒そうとするが、ゲンドウが「暴力と恐怖は、我々の決着の基準ではない」

と語った様に、シンジがこのとき起こしていた行動は意味のないことである。大切なことは父ゲンドウとシンジが対等な存在となることであり、それは相手を倒すことではない、お互いを強く知り、お互いの存在を認め合い、シンジも社会人の一人として認められることなのである。

シンジにとって大切なことは、対象を知り、現実を受け止めていくことである。それが社会への一步を踏み出すことであり、エディプス葛藤を乗り越えていくことなのだ考える。そのことにシンジは気がつき、「うん。父さんと話したい」とシンジは言ったと考える。

W.ビオンは人の出会いは認知からではなく、情緒的体験から始まるといい、その情緒と情緒を持って人は繋がると松木は述べている。

シンジの「父さんと話したい」と述べたことは父・ゲンドウと深く情緒的に関わり、自身のそして父の真実を深く知る覚悟ができているということであり、その覚悟の中でシンジは真摯に父の思いを知ろうとしている。

### 3) 父との対話 アディショナルインパクトを起こしたゲンドウ

前回、児玉さんが、シンジが「父さんは、ここで何がしたいの？」と尋ねたのに対し、ゲンドウがシンジのことを「初号機パイロット」と呼び、そこには、よそよそしさがあると話していた。そこにはゲンドウ自身が息子シンジに打ち解けられない心の壁がある様感じられる（それが A-T フィールドとも考えられるが）。しかしシンジの「父さんは、ここで何がしたいの？」という真摯な思いに、ゲンドウが何故アディショナルインパクトをなぜ起こしたのか？という思いを語っていく。彼はそれを起こした理由として「虚構と現実を溶け合わせる」ことだと話し、冬月も「希望という病にすぎり、溺れるのも人の常だ。私も碓も希望という病にしがみつき過ぎている」と言っているが、二人の言っていることはどちらも同じことを言っている様感じられる。それはゲンドウの妻ユイの喪失を受け入れられていないということであり、ユイを生き返らせるという虚構にしがみついている。希望とかこつけて、現実を全能的に自分の都合のよいように操作することであり、現実を直面することを避けており（真の希望とは喪失を受け入れる中で初めて生まれるものであるから）、倒錯的行為である。

ここで、一つの点に気が付く。それはシンジとの相違点である。シンジは破においてゲンドウと同じ様に綾波の喪失を受け入れられず、救い出（生き返らせ）

そうとしてニアサードインパクトを起こす。しかしその後、父とは異なり、その現実に直面し、絶望し、苦悩し、綾波をはじめ様々な喪失を受け入れ、心が成熟し、父親と対峙している。その点、今のシンジとゲンドウとでは隔たりが生じている。

今、大切なことは父が、妻ユイを喪失したということを受け入れることであり、一方で、ゲンドウとユイ、二人の間に生まれたシンジが成熟した一人の個となろうとしていることに新たな希望を見出していくことなのである。それにはゲンドウと真摯に向き合い、彼の内的現実を受け止め、触れていくことが必要不可欠である。そして成熟したシンジが、その役割を担おうとしている。

### 3) 父との対話 アディショナルインパクト後

シンジ「父さんは何を望むの？」

ゲンドウ「お前が選ばなかったA・T・フィールドの存在しない、全てが等しく  
単一な人類の心の世界。他人との差異がなく、貧富も差別も争いも虐待も苦痛も  
悲しみもない、浄化された魂だけの世界。そして、ユイと私が再び会える安らぎ  
の世界だ」

シンジ「父さん、もうやめようよ」

ゲンドウ「なぜだ？ なぜシンジがここにいる？」

シンジ「父さんのことが知りたいから。寂しくても、いつも父さんに近づかない  
ようにしていた。嫌われているのが、はっきりするのが怖かったんだ。でも、今  
は知りたい。父さんのことを」

ゲンドウ「A・T・フィールド？ 人を捨てた、この私に？」

ゲンドウ「まさか、シンジを恐れているのか、この私が」

シンジは、携帯音楽プレイヤーを彼に差し出す。

シンジ「これは捨てるんじゃなくて、渡すものだったんだね。父さんに」

シンジ「僕と同じだったんだ。父さんも」

ゲンドウ「ああ、そうだ。ヘッドフォンが外界と私を断ち切ってくれる。無関心を装い、他人のノイズから私を守ってくれた。だが、ユイと出会い、私には必要がなくなった」

ゲンドウは、その後ゆっくりと内面を語り始める。

### 【考察】

父との争いの後にシンジは父の思いを知ろうとする。そこで父の目論見をしる。それは彼自身がアディショナルインパクトを起こし、神を殺そうと考えていること。そして自身が神となり、A・T・フィールドの存在しない、全てが等しく単一な人類の心の世界、他人との差異がなく、貧富も差別も争いも虐待も苦痛も悲しみもない、浄化された魂だけの世界と創造しようとしていることである。

一見、その世界は非常に理想的な世界のように聞こえるが、ミサトやリツコ達

をはじめとした人々の考え（リツコ「私たちは、神に屈した補完計画による絶望のリセットではなく、希望のコンティニューを選びます」、ミサト「私は、神の力をも克服する人間の知恵と意志を信じます」）を無視し、寄せ付けようとしな  
い独善的な考えであり、何か誇大妄想的でさえある。

そしてゲンドウを続けて次の様に言っている。「ユイと私が再び会える安ら  
ぎの世界だ」ゲンドウは彼の妻、ユイの喪失を受け入れられずに、ボウルビイ  
の喪の作業の②思慕と探求・怒りと否認の段階（対象喪失を認めず、失った対  
象が存在するように振る舞う）にとどまっており、そこで躁的防衛をしている  
ようにも感じられる。これは新劇場版・破の最後でシンジが綾波の喪失を否認  
し、綾波を蘇らせ、彼女と一体になろうとする万能的な充足や歓喜の幻想にひ  
たる心性となんら変わらないのである。

シンジは躁的心性で起こすことになったニアサードインパクトによって、周  
りの人々は苦しめてしまったことを深く知っている。だからこそ「父さん、も  
うやめようよ。」と説いている。そして成熟したシンジはより父を深く知ろう  
とする。そこで父はA-Tフィールドを発動するが、ゲンドウがシンジと情緒的  
に関わることを怯えていることが明らかになる。そしてシンジが「僕と同じだ

ったんだ。父さんも」という。それは父と子の情緒が共有されていく瞬間のよう  
うに感じられる。その情緒に触発されるなかで父の過去が語られていく。

#### 4) 父の内的世界 人類補完化計画とは？

シンジとゲンドウの対話の後にゲンドウの過去が語られていく。幼少期に人と関わるのが苦手、独りでいることを何よりも好んだこと、しかし大学時代にユイと知り合い、その考えが大きく変わる。ゲンドウが「私は生きることが楽しいと感じることを知った。ユイだけが、ありのままの私を受け入れてくれた」と話していた様に、ユイがゲンドウの傷ついた心を初めて受け止めてくれる対象となり、その中で彼の心が彩りを持つようになる。ユイが母の様な存在だったとも考えられる(ゲンドウの内的世界はシンジの内的世界そのものであり、ユイにより、彼の心が彩りを持つ様になったのも、シンジが綾波と知り合ったときと似ているように感じられる)。しかしその幸せな時間も長くは続かず、ユイはいなくなってしまう。ゲンドウはその時、初めて強い喪失の感情を抱き、それを受けきれないで苦しむこととなる。それが人類補完化計画に乗り出した背景である。

まさにユイの喪失が受け入れられないが故に自身が神となり、万能的に蘇らせようとする躁的心性である。

→人類補完計画とは分離を否認した肛門期の固着の世界である。

しかしその世界がいまだに叶えられないでいる現実にはゲンドウは苦悩する。

ゲンドウ「私は私の弱さゆえに、ユイに会えないのか。シンジ」

幼少のシンジ「その弱さを認めないからだと思うよ」

シンジ「ずっと分かっていたんだろう？ 父さん」

### 【考察】

シンジはこれまでの相次ぐ喪失を受け入れ、自分自身が犯した過ちの落とし前をつけようとしている。シンジがゲンドウに向けて言った言葉は、成熟したシンジがそれ以前の過去の自身に向けて言った言葉の感じられる。それであるが故に非常に核心をついた発言であり、その言葉がこれまで父と子の中で受けつがれた心性の反復に楔をうつものになっている。まさにこれまでのこと

に落とし前のつける言葉であり、そこから父の贖罪のきっかけになったと考えられる。

→ミサトからガイウスの槍が届けられる。そして父の贖罪が始まる。